

# 漢語複合語における構造的二重性

那須 昭夫

【キーワード】 構造的二重性, 異分析, 不適格な基体, 二字漢語, 無標の構造

## はじめに

合成語の形成は、接辞による派生と既存の語同士の結合による複合とに大きく分類されるが(野村 1977)、漢語の場合、ある形態素が接辞的に語形成に参加する一方で、同一形態素が同時に二字漢語の構成素として機能する場合があります、派生と複合とを明確に区別することは難しい。漢語複合語では、意味的多義性を示さないにもかかわらず二種類の内部構造分析を許容する語が存在するが、このような現象は、漢語の語形成に見られる上述のような特徴を反映したものであると考えられる。以下、小論では構造的二重性の見られる複合語を第一節で取り上げ、第二節では構造的二重性をもたらす原因について論及する。第三節および第四節では、二字漢語が現代漢語の基本単位として存在し、構造的二重性をめぐる現象においても二字漢語の単位が重要な役割を果たしていることを述べる。

## 1. 構造的二重性

### 1.1. 複数の内部構造分析

複合語は単純語とは異なり、その内部に階層的な構造を持つ。

#### (1) student film society

a. [student [film society]] = film society for students

b. [[student film] society] = society for student films      Spencer(1991:310)

たとえば(1a)では、‘film society’が第一次的な複合語として作り出されてそれに‘student’が結合するが、(1b)では‘student film’という単位が第一次的複合語となる。このような階層構造の違いによって、両者の意味的多義性をとらえることができる。

複合語が階層的な構造を持つという点では漢語も同様である。しかし、次のような漢語複合語は、意味的多義性がないにもかかわらず、二通りの内部構造に分析することが可能である。

#### (2) 経済学部

a. [[経済学]部]

b. [[経済][学部]]

「部」を接辞的形態素と考えた場合には(2a)のように分析され、「学部」という語が「経済」という語と複合したと考えると(2b)のように分析される。同様の例としてはこの他にも次のようなものが挙げられる。

(3) 二通りの構造分析が可能な漢語複合語

心理学者：[[心理学]者]／[[心理][学者]]，言語学者：[[言語学]者]／[[言語][学者]]，

英文学科：[[英文学]科]／[[英文][学科]]，文学士：[[文学]士]／[[文][学士]]

小論では、上述のような二通りの構造分析が可能となる現象を漢語複合語の構造的二重性としてとらえ、そのような現象からうかがうことのできる漢語の語形成上の特質および、漢語の基本単位について論及したい。

1.2. 既成語に対する異分析

Aronoff(1976)によると、語形成規則は新語の造出という生産的側面のみならず、ある言語を母語とする者がその言語の中で用いられている既成語の内部構造を分析する際にも機能するとされる。すると「経済学部」という語で(2)のような二通りの構造分析が可能であるということから、それが次のような二つの語形成規則を有していると考えられることもできる。

(4) 「経済学部」の語形成規則

a. [[\_\_\_\_\_]wd+\_\_\_\_\_af]

b. [[\_\_\_\_\_]wd+[[\_\_\_\_\_]wd]

しかし語形成規則は、ある語が初めて造出される時に一回だけ適用されるものであり、規則によって一度作り出された複合語は新たな語彙項目に加えられ、以後同一の複合語が再び規則によって形成されることはない。そうすると、(4a)と(4b)のうちのどちらかが適用されて「経済学部」が形成された後に、別の規則によって同一の語彙項目「経済学部」を再び形成するような操作は禁止されることになる。

一つの語に対して複数の語形成規則が存在しないとすると、一つの規則から形成された「経済学部」が二通りの構造分析を受けるという事実に対してはどのように考えたらよいのであろうか。ここで、(4)のどちらかの規則によって「経済学部」が形成された後で、もう一つ別の分析が生じたという可能性が考えられる。すなわち、異分析の結果として構造的二重性が生じたと考えることができるのである。

「-学者」という連鎖を語末に持つ「言語学者」「心理学者」のような漢語複合語をとりあげて、この点について考えてみたい。杉村(1986)は、「-学者」という連鎖を語末に持つ漢語複合語では専ら(5)のような構造のみが存在することを前提とし、

(5) 「-学者」の構造①

[[\_\_\_\_\_]学者]

「-者」に前接する[[\_\_\_\_\_]学]という基体の数だけ「〇〇学者」という新語が造出されると述べている。すると(5)は「〇〇学者」という語をかなり生産的に造出する語形成規則であるということになる。しかし、「-学者」という連鎖を語末に持つ複合語が、常に(5)の構造を持つとはいえない場合がある。たとえば「貧乏学者」という語は(6)のようにしか分析されない。

(6) 「-学者」の構造②

[[\_\_\_\_\_]学者]

ここで、\*「貧乏学」という基体が不適切なものであることから、「貧乏学者」が(5)の構造を持たないことは明らかである。

「学者」という基体を用いても「-学者」という連鎖を語末に持つ複合語を形成することが可能であるという事実は、(3)に挙げた「言語学者」「心理学者」において[[言語][学者]], [[心理][学者]]のような異分析を導く要因となっていると考えられる。(6)の構造では複合語前項が後項を意味的に下位範疇化することになるが、「言語学者」「心理学者」においても後項にあたる「学者」の類別を前項の基体が行なっていると解釈した場合には、「言語学者」「心理学者」に対して(6)のような構造を想定することが可能になると考えられる。

## 2. 漢語の造語上の特徴と異分析

### 2.1. 接辞認定における問題

「言語学者」「心理学者」などにおける構造的二重性は、形態素/者/が[言語学], [心理学]など語の資格を持つ単位に結合できる一方で、/学/という拘束形態素に結合して二字漢語「学者」を形成することもできるという点に起因しているといつてよい。

「言語学者」「心理学者」を(5)のように分析した場合には、/者/はあたかも接辞のような役割を果たしている。それ自身では自立不可能でありながら、自立可能な語基に結合して新たな合成語を作り出しているからである。したがって、ある漢語形態素が自立的な語基に結合して新たな語を構成している場合、これを接辞とみなす意見もある(水野 1987)。

しかし漢語では、接辞の領域を明確に示すことはそれほど容易なことではない。まず、接辞はそれ自体では自立不可能であるために拘束形態素に分類されるが、漢語形態素はほとんどが拘束形態素であるため(野村 1978)、自立不可能性という基準においては大多数の漢語形態素が接辞にあてはまってしまうことになる。これが第一の問題点である。

また接辞には、自立可能な語基と結合して生産的な派生をもたらす機能があり、水野(1987)はこの造語力の強さという側面を接辞の重要な特徴と考えて、[AB]C という構造を持つ三字漢語の要素 C を一様に接辞としてとらえるべきであると主張しているが、

#### (7) 漢語の接辞 (水野 1987)

改正案・事務員・家政科・専門家・営業課・産業界・商店街・生物学・体育館・  
危機感・人生観・検察官・輸送機・入学金・太郎君・政府軍・首都圏・特急券・  
流行語・印刷工・中立国・代表作・解決策

たとえば「改正案・政府軍・特急券・解決策」に現れる「案・軍・券・策」などの形態素を一様に接辞とみなすことには問題があるように思われる。というのは、先述のように接辞は拘束形態素であり単独では文の中に現れないという特徴を持っているためである。しかし、「案・軍・券・策」などは実際には単独で文の中に出現できる。

(8) 「案・軍・券・策」

- a. よい案が浮かぶ。
- b. 軍の反乱が起きる。
- c. 映画の券をなくす。
- d. 策を用いて人を陥れる。

語としての資格を持つ要素までも一様に接辞に含めるという考え方は、接辞が拘束形態素であるという一般的あり方に反することになってしまう。これが第二の問題点である。

漢語接辞の認定に関しては以上のような問題があることから、漢語において接辞のみを独立の範疇として分類することは極めて困難なことであると考えられる。したがって漢語の語形成の性格を追究する上では、どの要素が接辞に該当するかという点に注目するよりも、どのような単位にでも比較的自由に結合できるという漢語形態素の特徴に注目すべきであると思われる。

## 2.2. 接辞的機能と二字漢語の構成素としての機能

漢語に比べて接辞の抽出が比較的容易な英語では、接辞の結合する対象が厳しく制限されている例が見られる。たとえば拘束形態素に結合する接辞は第Ⅰ類接辞のみに限られており(例: *inert*, *friction*, *local*)、第Ⅱ類接辞は専ら単純語・複合語・派生語に対して結合する(Siegel 1974:149-50)。また接辞同士の結合は許容されない。

翻って漢語では、ある形態素が拘束形態素・単純語・複合語・派生語のいずれにも結合する例は数多く見られる。たとえば三字漢語「担当者・経営者・入学者・犯罪者」などを構成する/者/は、この場合には単純語に結合していることになるが、同時に「学者・筆者・読者・医者」などの二字漢語を構成する場合には、拘束形態素と結合していることになる。

先ほど挙げた「学者」の連鎖を語末に持つ「言語学者」のような漢語で、構造上二通りの分析が可能になるのは、/者/が[言語学]に対して接辞的に結合しているのか、それとも「学者」の一部をなす拘束形態素なのか、十分に判断できないためであると考えられる。つまり、そのどちらの分析をとっても文法的な構造が得られるということが、構造的二重性を許容しているのである。漢語に見られる構造的二重性は、/者/が常に接辞に限定されることはなく場合によっては二字漢語の一部として機能するという、これまでみてきた漢語の構造及び造語法のあり方に起因する現象であるといえる。

## 3. 不適格な基体の排除と異分析の禁止

### 3.1. 不適格な基体の排除

ところで、「言語学者」「心理学者」などは(3)のような二つの構造分析が可能であったが、「-学者」の連鎖を語末に持つ複合語の全てにおいて、それが可能であるわけではない。たとえば「法医学者」では(9a)の分析がとられ、(9b)の分析は不自然なものとなる。

(9) 法医学者

a. [[法医学]者]

b. \*[[法医][学者]]

また、「英語学科」「中国語学科」「西洋史学科」などの語において(10)のような分析が行われる一方で、「中国文学科」は(10)の分析は行われず、(11)のように分析される。

(10) [[\_\_\_\_\_]学科]

(11) [[\_\_\_\_\_]科]

つまり、「法医学者」「中国文学科」などは、構造的二重性を持ち得ない漢語複合語であるといえる。ここで、これらの語で構造的二重性が見られない理由について考えてみたい。

はじめに、「法医学者」でなぜ(9b)の構造分析が認められないのかという点については、(9b)に現れる[法医]という基体が「法医学」の意味を予測させないということが原因として考えられる。試みに、「校医・産医・獣医・名医・洋医」などの二字漢語の意味を考えてみると、それらがみな「医者」を含意していることがわかる。換言すれば、「校・産・獣・名・洋」などの拘束形態素が意味的に医者の種類を下位範疇化していることから、「～医」という形を持つ漢語は医者種類の範疇に含まれるといえる。これに対して、「～医」という形を持つ漢語が「医学」の下位概念になる例は、管見の限り見つけることはできない。

(12) 「～医」

開業医≠開業医学, 学校医≠学校医学, 外科医≠外科医学, 主治医≠主治医学,

保険医≠保険医学, 良医≠良医学, 女医≠女医学

このように、「～医」という形の語が医者の下位概念になるという一般的な意味構造に照らし合わせてみた場合に、「法医」から「法医学」を予測するということが極めて不自然であることから、「法医学」のまとまりをあえて分割するような(9b)の構造分析が排除されると考えられる。

同様に「中国文学科」でも、(13)のような分析が行われた場合に、[中国文]が「中国文学」を含意しないということにより、この分析が排除されると考えられる。

(13) \*[[中国文][学科]]

「中国文」が「中国文学」を含意しないということは、次の文が「中国文学の作品を読んだ。」を意味し得ないことにより理解できる。

(14) \*中国文の作品を読んだ。(≠中国文学の作品を読んだ。)

既述のように、漢語複合語において二通りの構造分析が可能となる背景には、ある漢語形態素が接辞的な職能と二字漢語の一部としての職能とを同時に果たするということが原因として存在していると考えられるが、すべての複合語でそのような現象がみられるわけではない。「法医学者」「中国文学科」などの例で検討したように、ある分析が結果として不適格な基体を含む場合には、その分析は禁止される。\*[[法医][学者]]の場合には\*[法医]が、\*[[中国文][学者]]では\*[中国文]が不適格な基体である。また第二節で挙げた「貧乏学者」が\*[貧乏学者]のように分析されないのは、\*[貧乏学]という基体が不適格なものであると

判断されるからである。

### 3.2. 語形成規則への入力単位の保存と異分析の禁止

また、[中国文学]がさらに[[中国][文学]]という下位構造を持つということも、(14)の分析を排除する要因となっていると考えられる。つまり、二字漢語のまとまりである[文学]の単位を崩すことが阻止され、そのために(14)の構造分析が行われないと考えられるのである。ここで語形成の階層に注目すると、「中国文学科」においては[[中国][文学]]が形成される階層よりもさらに下位の階層において既に[文学]という完結した単位が語形成要素として規則への入力として用いられていることがわかる。



ここで二字漢語の基体[文学]を「完結した単位」と称したことには次のような理由がある。二字漢語の内部構造を意味的に分析した場合には、確かに野村(1988)が示したような形態素同士の複合という構造を持つ。その一例を挙げると、「読書」は「読<sub>v</sub>+書<sub>n</sub>」という中国語のシンタクスを反映した構造を有し、「幼児」では幼<sub>A</sub>が児<sub>n</sub>を修飾するという関係が見られる。しかし、「語に基づいた形態論」(Aronoff)の仮説に従って語形成の側面から二字漢語の位置付けを行なった場合には、二字漢語は漢語の語形成規則への入力となる最小の単位として扱うことができよう。すなわち、二字漢語はもはや分割不可能な単位としてレキシコンの中に存在していることになる。したがって(15c)より下の語形成階層は、[中国]と[文学]に関する限り存在しないと判断できる。このことは、現代語において二字漢語が語形成規則によって新造される可能性がきわめて低いという、宮島(1967)による定量的調査によって裏付けられよう。

二字漢語の単位の完結性という観点から考えると、「中国文学科」において(10)のような分析がなされないのは、語形成規則への最小の入力単位である二字漢語を再び分割するような分析が避けられた結果であるという。このことは、これまで扱ってきた構造的二重性を示す漢語複合語に共通する現象として、次のように一般化できると思われる。

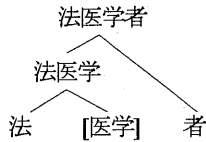
#### (16) 異分析の阻止に関する条件

複合語の最右端に位置する二つの形態素が二字漢語のまとまりをなすとの異分析は、最右端の形態素の左隣に位置する形態素が語形成規則への入力単位としての二字漢語の一部であるときには禁止される。

...[XY]Z#   ×→   ...X[YZ]#(#は語末であることを示す。)

「法医学者」で(16)を検証してみたい。「法医学者」は(17)のようなプロセスで形成されているが、この場合、右端の形態素/者/とその左隣の形態素/学/とを結合させて(9b)のような異分析を行なうことは、(16)により阻止される。そのような操作が、語形成規則への最小の入力である[医学]の単位を崩すことになるからである。

(17) 「法医学者」の語形成



一方「言語学者」「心理学者」で構造的二重性が容認される背景には、[言語学]、[心理学]が二字漢語[言語]、[心理]に/学/の結合した合成語であり、形態素/学/が二字漢語の一部をなしていないからであると説明できる。

(18) 言語学者

[[言語]学者]

この場合には、形態素/語/と/学/が二字漢語[語学]の形では語形成規則に入力されていないため、(16)の条件が適用されないものと考えることができる。

#### 4. 漢語語形成の基本単位

これまで検討してきた諸現象が示唆することは、現代漢語においては二字漢語の単位が語形成の基本的単位として働いているということである。前節で検討したように、漢語複合語で構造的二重性が許容されるのは、語形成規則への入力最小単位である二字漢語を分割しない場合に限定される。一方、「心理学者」「言語学者」などの四字漢語で構造的二重性が許容される背景には、ある複合語が二字漢語同士の結合に分析されることに対して、その操作を排除する積極的要因がないだけでなく、むしろ二字漢語同士の結合に分析することがいたって普通の操作として認められているということも、原因として存在していると考えられる。

たとえば、四字漢語の構造について定量的に分析した野村(1975)の調査結果によると、二字漢語同士の結合による[[AB][CD]]型の構造を持つものが、実に 90%以上の割合を占めていると報告されている。ここで、二字漢語同士の結合を複合漢語における無標の構造であると考えることができる。すると、「言語学者」「心理学者」などの複合語が[[ ]者]というフレームで造語されたとしても、二字漢語同士の結合である[[ ][学者]]という構造に分析されることは、複合語の無標構造への再分析という、極めて自然な現象であると捉えなおすことができる。

また、音韻現象がそのような無標構造を支持しているとみられる例がある。「英文学科」「言語学科」「心理学科」などの複合語は、(19)のような構造的二重性を持ちうる語である。

(19)

- a. [[AB][CD]] : [[英文][学科]], [[言語][学科]], [[心理][学科]]
- b. [[ABC]D] : [[英文][学科]], [[言語][学科]], [[心理][学科]]

二字漢語同士の結合に適用される複合語アクセントでは、複合語後項にアクセントが位置する(秋永 1985)。

このため(19a)の構造は次のようなアクセントで実現される。

(20) エイブンガッカ, ゲンゴガッカ, シンリガッカ

また、/科/という接辞的形態素が基体に結合した(19b)の構造に対しては、「哲学科」「数学科」「構造工学科」「中国文学科」などの語と同様に、平板型アクセントが付与されると考えられる。

しかし、実際に現れるのは(19a)の構造を反映した(20)のアクセントだけである。これは、決して(19b)が非文法的な構造として排除された結果ではない。(19b)が適格な構造であることは、[英文学]、[社会学]、[心理学]、[言語学]などの基体が実存する語であることおよび、[[\_\_\_\_\_]科]という構造が文法的な語を産み出す構造である(例:「哲学科」「構造工学科」)ことから、明らかなことである。

「英文学科」などの語において(20)のアクセントのみが現れるという事実は、次のように説明できる。(19)の構造はどちらも文法的であり、どちらか一方のみを優先的に選択する動機となる要因は存在しないといえる。そのような条件下にあって、一方だけが、それも二字漢語同士の結合である(19a)の構造を反映したアクセントのみが選択されるということは、条件的に中立の保たれている場合に、内部構造に関する情報のより簡潔な構造として、無標の構造が選択された結果であると考えられる。

特別な条件がない限り無標の構造が支持されるような現象の類例としては、外来語に対するアクセント付与が挙げられる。四モーラ以上の外来語では、原則として終わりに三モーラ目にアクセントが位置するが(秋永 1985)、これは無標のアクセントと考えることができる(Haraguchi 1991:24-26, Sato 1994)。それ以外の型を示すアクセントは、特別な条件を反映していると考えられる。たとえば、輸入時期が古かったりあるいは頻用度が高い語の場合には、アクセントが平板化する。ある言語社会で特定の外来語が頻繁に使われる場合にもアクセントが平板化する傾向にあるが(最上 1994)、そのようないわゆる「専門家アクセント」は、使用頻度の高さという社会言語学的要因が背景に存在する。だが、こういった特別な要因が加わらない限り、すなわち、ある外来語に対して条件的に全く透明な状況の下では、無標のアクセントが支持される傾向がみられるのである。

## 5. おわりに

小論で取り上げてきた漢語複合語における構造的二重性は、漢語の語形成に見られる次のような性質を反映した現象であるといえる。漢語の場合、接辞専用に用いられる拘束形態素は限られており、ある拘束形態素が接辞的に用いられる場合もあれば、別の拘束形態素と結合して二字漢語の一部となることもある。このような性質に加え、漢語の語形成は接辞的形態素の付加および、既成の二字漢語同士の結合という、二つの方法によって行われることが多い。このため、ある形態素の連鎖 AB が二字漢語のまとまりをなすのか、あるいは B が接辞的に結合したものなのか、場合により判断の難しいことがある。このような場合、文法的な構造分析の候補が二種類存在し得ることになり、それが構造的二重性を導くと考えられる。

一方、分析の結果として不適格な基体が出現する場合には、構造的二重性はみられない。ある構造分析が不適格な基体を導く場合に共通していえることは、語形成規則への入力最小単位である二字漢語のまとまりを、複合語が完成した後で分割するという操作が加わっているということである。最小単位である



二字漢語を分割する操作は好ましくなく、このことから、二字漢語の単位が現代漢語の語形成の基本単位として用いられているという点に論及した。また、第四節ではそのような主張を裏付ける音韻論的な現象を、文法的に適格な構造分析が複数存在するケースに関して取り上げた。

【附記】本研究は、平成六年度文部省科学研究費奨励研究(課題番号：0803)の研究成果の一部である。

#### 【参考文献】

- 秋永一枝 1985. 「共通語のアクセント」NHK(編).『日本語発音アクセント辞典』日本放送出版協会.
- Aronoff, Mark. 1976. *Word Formation in Generative Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Haraguchi, Shosuke. 1991. *A Theory of Stress and Accent*. Dordrecht: Foris.
- 宮島達夫 1967. 「現代語の形成」『ことばの研究 3』(国立国語研究所論集 3) 秀英出版
- 水野義道 1987. 「漢語系接辞の機能」『日本語学』6-2. 明治書院
- 最上勝也 1994. 「放送のことばとアクセント ―外来語アクセントの平板化を例に―」『日本語学』13-5. 明治書院
- 野村雅昭 1975. 「四字漢語の構造」『電子計算機による国語研究VII』(国立国語研究所報告 54) 秀英出版
- 1977. 「造語法」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店
- 1978. 「接辞生字音語基の性格」『電子計算機による国語研究IX』(国立国語研究所報告 61) 秀英出版
- 1988. 「二字漢語の構造」『日本語学』7-5. 明治書院
- Siegel, Dorothy. 1974. *Topics in English Morphology*. Ph.D. Dissertation, MIT.
- Sato, Hirokazu. 1994. Bimoraic Rhythm and Accentuation in Japanese. Conference Handbook, The 12th National Conference of The English Linguistic Society of Japan.
- Spencer, Andrew. 1991. *Morphological Theory*. Oxford: Blackwell.
- 杉村博文 1986. 「-者 -家」『日本語学』5-3. (特集 接辞) 明治書院